

季刊 ジャネット Ja-Net

Ja-NetはJapanese Networkの略です。「にほんご」を通して編集室と読者の皆様を結ぶ情報誌にしたいと考えています。

No. 52

2010年1月25日発行

- ◆ View from the Other Side 3
- ◆ あちこち日本語ご紹介
(徳島県徳島市) 4
- ◆ あちこち日本語ご紹介
(ベトナム社会主義共和国 ハノイ) 5
- ◆ 教材紹介 6
『聴くトレーニング〈聴解・聴読解〉応用編』
『正しく書ける カタカナ語すらすら 1日10分』
『中間言語語用論概論』
- ◆ なんでも情報BOX 8

スリーイーネットワーク

巻頭寄稿

グローバル化の時代の日本語教育

一橋大学大学院教授 伊豫谷 登士翁



人の移動と言葉

人の移動に関心をいだいてきたものとして、グローバル化の時代といわれる現代において、人の移動と外国語の修得との関わりについて、考えてみたい。移動する人びとは、否応なく言葉の変容を蒙り、その一部は公的な機関による外国人への言語教育によってもたらされる。しかし日本においては、移民国ではないという政策理念が学問分野の隅々にまで浸透し、移民を含めた人の移動に関わる様々な研究分野のなかで、移住してきた人たちの言葉の変容や国家や社会による外国人の言語取得への介入のあり方が問われることはあまりなかった。

グローバル化の時代といわれる現在、世界中でおよそ2億人を越える人たちが自分の生まれ育った国を離れて、海外で生活を営んでいる。移民の時代といわれた19世紀後半から20世紀初めには、数千万人の人たちが、大西洋や太平洋をまたいで新しい大陸へと渡った。世界人口の増加を考えれば、現在の移民の数を多いとみるか少ないとみるかは、立場によって異なるが、現代が、新たな移民の時代であることは確かである。現代の国家体制を「移民国家」と呼ぶ人もいる。移住した人たちが新しい社会のなかで生き抜くには、現地の言葉を習得することは必要条件であり、このことは今も変わりはない。しかし、移民たちのおかれている状況は、かつての移民の時代とは大きく異なってきている。

あらためて言うまでもなく、グローバル化のひとつの表れである輸送通信技術の発達、空間と時間の制約を劇的に縮減した*。生まれ育った場所は永遠の故郷ではなく、いつでも容易に戻れる。出身地の情報は、ほぼリアルタイムで日常的に入ってくる。電話やインターネットを通じて、家族や友人とはいつでも会話できる。移住してきた人たちが自分の生まれ育った言葉で生活する風景は、世界の各地域で見られる。そこから、たとえばアメリカでは、英語とスペイン語やアジアの言葉が混ざった小説が生まれ出されてきている。最近の小説において高い評価を得ている文学には、移民の人たちの書いたものが多い。日本でも、韓国や中国の言葉が入り交じった映画

が作られてきた。移動する人々が、言語を含めた新しい文化を生み出してきているのである。

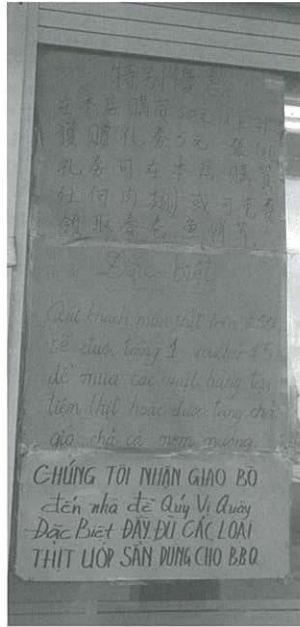
エスニックタウンが特殊な場所とみなされた時代は終わった。グローバル化といわれる時代において、人びとはたえず移動し続ける。さらにここでいう移動は、物理的な移動だけが問題となるのではない。そして移動する人びとが、ヴァーチャルな空間を含む、国境を越える新しい空間を生み出してきている。もはや人びとを一定の領域に固定することはできないのである。そこで表れてきている課題は、たんに移民にとっての言葉の問題だけでなく、言葉そのものの問題であろう。

国民—国家の変容と公的な言語教育

グローバル化した時代においては、かつての移民の時代と較べて、移民に対する公的な言語教育の持つ意味が大きく変化してきているのではないだろうか。二つの移民の時代には、大きな違いがある。その最も大きな差異は、国民と国家との一義的な結びつきにある。19世紀の後半は、近代国家が一定の領土を囲い込み、国民を創り出したいわば国民国家の形成期である。それに対して、グローバリゼーションの時代とは、この国民と国家との一義的な結びつきが揺らいでいる、いわば国民国家の崩壊期である。もちろん、崩壊といっても、国民国家が近い将来に無くなるというのではない。国民の範囲とシティズンシップ、領土と国民との一致という近代国家の前提が揺らいでおり、移民の増加が、こうした揺らぎの一因である、ということである。

グローバル化を考えたときに、外国人が日本語を学ぶことにおいてさしあたり問題となるのは、次の二つの点である。ひとつは、世界共通言語としての英語との関わりであり、もうひとつは、言語教育の同化主義的な強制の問題である。前者については、ここでは、英語が世界の共通言語となるなかで、外国人が日本語を学ぶ積極的な意味はどこにあるのか、という点を指摘するに留めておこう。アジア諸国の人びとの間でアジアの問題を議論する際に、英語が用い

られる。英語が世界の共通語になったことによって、英語を母語としない人たちの間でも対話が可能となった。しかしそうした場合、個々の地域固有の問題が、普遍的な概念として英語という言語に還元され、英語圏で形成されてきた問題構成のなかで理解されてしまう、ということである。英語の浸透は、しばしば知の支配と結びついてきた。英語以外の言語の習得は、そういった知のあり方に対する挑戦が期待される。日本語を学びたいという要求は、しばしばこれまでの欧米中心的な志向を



カブラマツは、インドシナ系難民を中心に作られた、シドニー郊外の街である。店の前にはベトナム語やラオス語などとともに、共通語としての中国語と英語が並ぶ。エスニック料理店では、「真正」であることを表すために、わざと英語のメニューはおかないという。かつてのオーストラリア多文化主義の陳列棚は、いまでは、シドニーから最も近い「外国」を掲げた観光地になっている。

相対化したいという要求から生まれてきている。

もうひとつは、移民が日本語を習得することへの公的な介入のあり方についてであり、言語学習が国民化と結びついてきた点である。国民化といっても、国籍取得という狭い意味ではなく、日本的といわれる規範や規律を身につけることを含めた広義の意味である。日本においても、すでに二百万人を越える外国人が生活しており、その数は今後も確実に増え続ける。日本も、もはや移民国家なのである。

国家あるいは社会の言語教育への介入は、しばしば、同化主義的であった。言葉の習得に対して国家が支援する場合に、移住してきた人々が支障なく日常生活を送る、あるいは社会的に上昇する機会を提供するという面があったことは確かである。しかし、これまでの言語教育の持つ役割は、国家が望ましい国民を創り出すために、あるいは国民が望ましいと考える住民を教育する手段として、そしてわれわれが支配する領土を管理するために言語を習得させる、という点にあった。植民地主義のもとで行われた宗主国言語の教育は、その典型的な事例であり、さまざまな場で行われる外国語教育も、この事例に含まれる。現在においても、多くの国において、国籍取得条件のなかに、国家語の能力試験が含まれている。言語教育は、いまでも、国民の条件を国家が管理し、国民と国家を一致させる試みの一翼を担っているのである。

グローバル化時代の日本語

国民国家の崩壊期においては、外国語教育は変化せざるをえない。いまから十数年前のことであるが、アメリカで生活した際に、ESL（第二言語としての英語）の授業を受けたことがある。その時の教師は、中南米出身の女性であり、かつては「正しい英語」を学ぶことが目的であったが、いまでは「自分の意志を伝えられる英語」を習得することが目的になっている、と話していた。英語としての「正しさ」よりは、自分の意志を伝えることこそ大切である、といった意味である。さらに言うならば、英語というものを固定的に考えるのではなく、変化する言語としての英語が考えられているのである。膨大な移民が英語を変えつつあると言われているが、他方では、英語能力の水準は、現在においても、アメリカ社会の階層秩序を構成

している。変化する英語と英語能力による階層化という二つの相矛盾する事態に対して、これまでのESLの授業は、英語の正当性を維持し、階層化を同定する役割を果たしてきた。ESLの現場において起こっていることは、外国人への英語教育が同化主義に無自覚に協力してきたことへの反省ではないだろうか。

アメリカの事例が、日本に適応できると言っているのではない。しかし、日本語教育のあり方はアメリカから学ぶことも多くあるだろう。グローバル化といわれる時代は、何よりも、国民国家を含めた場所そのものの固定化が崩壊しつつある時代であり、固定した国民言語が揺らいできた時代である。言い換えるならば、移動する人たちを含めた場所の創造と想像がたえず交差する時代であり、そのなかで、日本語も急速に変化しつづける。グローバル化が進むなかで、外国人に対する日本語教育も、日本語を変化する言葉として柔軟（フレキシブル）に対応することが求められる。日本語教育という場においても、場所から移動を規定しようとするのではなく、移動から場所を捉え返す視点への転換**が必要であろう。

* グローバリゼーションと呼ばれる時代における移民の抱える課題については、拙著『グローバリゼーションと移民』有信堂高文社、2001、を参照

** 伊豫谷登士翁編『移動から場所を問う』有信堂高文社、2007

伊豫谷 登士翁（いよたに・としお）

国際経済学者。一橋大学大学院社会学研究科教授。専門は、世界経済論（グローバリゼーション）、移民研究。

財団法人海外技術者研修協会 創立50周年記念 日本語教育センターシンポジウム「国境を越える人の移動と外国人支援—日本語教育の現在と未来—」（2月20日（土）、御茶ノ水・全電通労働会館ホール）で基調講演を予定。

<http://www.aots.or.jp/jp/jlct/index.html>



『グローバリゼーションと移民』
伊豫谷登士翁 著 有信堂高文社 刊（2001）

学習者の目

このコラムでは、
学習者の視点での話題を
お届けします

View from the Other Side

わたしはダビデです

ダビデ・ロッシ (イタリア)

ずっと日本にいたいというイタリア人、
ダビデ・ロッシさんにお話を聞きました。

——ダビデさんというお名前、日本人の
わたしには耳慣れた感じがします。

そうですね。みなさんにすぐ覚えても
らえます。日本はイタリア人が少ないで
すね。珍しがられます。

——ずっと日本にお住みになりたいとい
うことです。

ええ、日本が好きです。チャンスがいっぱいあります。

今、東京の会社でIT技術者のヘッドハンターの仕事をしています。
1カ月前に入社したばかりでトレーニング中です。いい会社なので
続けたいと思っています。

それからプライベートレッスンでイタリア語を教えています。

——日本がお好きなんですね。きっかけは何だったのでしょうか。

大学を卒業したときに友だち4人で京都や東京に来ました。3週
間の旅行を通していろいろ感じました。そのときいつか必ずまた日
本へ来ようと思った。

——「いろいろ」どんなことを感じられたのですか。

イタリアと日本では、文化も人の性格も逆さまみたいでした。京
都と東京も全然違いました。わたしはローマ育ちですがイタリアは
どこも全部古いです。そしてイタリア人はオープンな性格です。

「英語は話せない」とよく日本人は言いますが、そういう人でも
けっこう英語が話せます。イタリア人はちょっとでも英語を知って
いれば「話せます」といいますし実際話せます。間違いがいっぱい
ありますが気にしないで話します。(ロンドンに住んでいるとき)イ
ギリス人はあまり聞きたがりませんでしたが、それでも話します。
日本人は話せるのに話せないと言います。わからないことだらけの
日本が大好きになりました。そして、この日本でもっと時間を過
ごしたいと思いました。

思い出してみると、中学生のころよくビデオゲームで遊びました。
『スーパーマリオ』*、マリオとルイージという双子の兄弟が出てき
ますが、あれはイタリア人のキャラクターですよ？ おもしろか
ったです。ちょっと前のゲームですが『シェンムー』**も好きです。
このゲームから「日本」を感じました。ゲームを通して日本の文化
や伝統に触れてきました。

——日本語はどこで学んだのですか。

初めて日本語を勉強したのはロンドンなんです。

イタリアの大学でコンピューターサイエンスを専攻し、大学を卒
業してロンドンで2006年10月から約2年雑誌社のWEBサイトチーム



で働いていました。いつか日本に行こうと決めていたので半年間、
週1回日本語学校に通いました。

そして2008年6月、会社を辞めて、日本に行くことにしました。

——ずいぶん早く日本に来ることになったのですね。

ええ。日本へ行きたい気持ちが大きくなりましたから。そして日
本語学校を探しました。

早稲田にある日本語学校で1年間日本語を勉強しました。入学し
て半年後の12月、日本語能力試験で3級に合格し、次の年の7月に
2級を受検しました。すごくがんばったのですが不合格でした。そ
れで12月も2級にチャレンジしました。「漢字」は簡単でしたが、
「聴解・読解」が難しくて驚きました。

——日本語の勉強を続けていらっしゃいますか。

会社では英語を使っているのですが、あんまり日本語を使う機会が
ありません。日本人の友だちと日本語で話すのは週に3回くらいです。
ですからだんだん漢字も忘れてきました。

日本語学習は続けたいと思っていますので、WEBサイトを利用し
て、日経のサイトを読むようにしています。短い文でだいたいわか
るので飽きません。仕事のためにIT関連の記事を読みたいと思っ
ていますが、まだ難しく読めません。

——今の生活を楽しんでいますか。

日本に来て1年9カ月、生活にもなれてきました。イタリアのス
パゲティがいちばんおいしい種類ももっとたくさんありますが、
日本のスパゲティはロンドンのよりもおいしいです。日本のシェフ
はイタリアで勉強してきていますね。イタリアでスパゲティは母の
味。家族ごと、街ごとに味があります。わたしは毎晩自分で料理し
ています。

日本語学校でいろんな国の友だちができました。その中の一人と
いっしょに欧米の人のための日本語学校紹介サイトを作っています。
これから日本で日本語を勉強したいという人に参考にしてもらえ
ばうれしいです。

* 『スーパーマリオブラザーズ』： 1985年9月に任天堂から発売され
たゲームソフト。キノコ王国(架空)の女王さまを助けるマリオとル
イージ兄弟が主人公。

** 『シェンムー』： 1999年12月にSEGAから発売されたゲームソフト。
日本人の高校生が主人公。1986年11月29日に横須賀の柔術道場から始
まる。

ダビデ・ロッシ

1982年イタリア、ローマ生まれ。大学(コンピューターサイエンス専
攻)卒業後、ロンドンの雑誌社に就職。WEBサイト制作。2008年6月
ロンドンの会社を辞めて来日。日本語学校(東京)入学。2009年6月、
人材紹介の会社に就職。

あちこち **日本語** 国内編



徳島県
徳島市
地域とつくる演劇活動—
まほろば国際プロジェクト

徳島大学国際センター Gehrtz 三隅友子

2009年7月の徳島新聞に次の川柳が選ばれていました。

＜ 老いて今 外国人に 介護され ＞
(鳴門市Mさん)

これは、徳島の状況をよく表していると思います。年をとった自分が、まさかの「外国人」に介護されることになったのかという驚きを擲揄しています。ではこれからこの介護する・される側の関係はどのようになっていくのでしょうか。徳島県は人口約81万人（以下、統計資料は2006年末のもの）に対して外国籍の人が66カ国5,354人と人口の0.7%で、大都市や外国人集住地域に比べて少ない（全国平均は1.63%）といえます。しかし、近年の高齢化及び少子化のために、労働力を海外の人材に求める大きな動きがあります。そしてEPA経済連携協定により昨年は8名のインドネシア人が県内の施設にて介護の仕事を始めました。この川柳はこの事実を受けて詠まれたものです。

とくしま国際フレンドシップ憲章

この現状に対して徳島県は外国人との共生を目指し、すなわち県民の外国人に対する受け入れ態勢をつくるために、2008年3月に「とくしま国際フレンドシップ憲章」を策定しました。この憲章は基本理念を「おもてなしの心で世界の人びと」とし、その目標を「多文化共生のまちづくり」と「国際社会に対応した環境づくり」としています。「知りあおう・ふれあおう・認めあおう」の3つの合言葉の下に13の具体的な行動を挙げています。地域のみなが協力してできることからの一歩を踏み出そうというものです。詳細はHPをご覧ください。

<http://www.pref.tokushima.jp/docs/2008040200037/>

この憲章に関わる中で問題となったことがあります。それは「おもてなしの心」ではいつまでも外国人をお客様扱いすることではないかという懸念です。しかし、遍路の「お接待」文化は四国では根強いもので



「まほろば国際プロジェクト」——2007年より美馬市脇町劇場オデオン座で行われている留学生と地域住民による演劇活動



国際色豊かな舞台上。演目は「どんぐりと山猫」

すし、これをうまく活用して、外国や外国人が遠い存在である場合、最初は「おもてなし」から始めてもよいのではとなりました。今の徳島には「おもてなし」で始まり、まずは比較的容易な互いに「知る・ふれる・わかる」を実行し、本当の意味でこの憲章を育てていこう、すなわち関わりの中で自分たちの価値観を少しずつ変えていくことにしたのです。

まほろば国際プロジェクト

私は大学教員としてこれまでに留学生と地域の人をつなぐ交流イベントや国際理解講座等をいくつか企画し実施してきましたが、憲章を育てていくのと同じように、また成長に合わせた段階に応じた活動が必要と考えています。

現在、大学の日本事情の授業で「吉野川プロジェクト」「徳島を食べる！プロジェクト」を実施しています。どちらも徳島の人的・物的・社会的リソースを活用し、専門家による講義と地域の施設へ訪問体験する学習活動です。最後には、留学生が各人のテーマに基づきレポートを作成し地域に向けて発表します。これは留学生と地域を結

ぶ双方向型のプロジェクトワークという位置づけです。

さらに2007年からは、「まほろば国際プロジェクト」と称し、(財)中島記念国際交流財団の助成を得て徳島県南西部の美馬市脇町劇場オデオン座(昭和8年(1932)建設、www.city.mima.lg.jp/4/64/000.283.htm/)にて、留学生と地域の住民の協力による演劇活動を行っています。1年目は宮澤賢治の「どんぐりと山猫」、2年目は山下明生の「島ひきおに」を演じ好評を得ました。大学から地域へと学習の場を広げ、留学生が日本人と協力して芝居の練習をする過程でのやりとりや、ことば以外の特に身体を使ったコミュニケーションの大切さも実感しました。また演じる者と観る者が一つの空間で日本語の作品を共有するという演劇の楽しさが、まさに「知りあおう・ふれあおう・認めあおう」につながったのです。3年目をむかえた今回は、宮澤賢治の「狼森と笹森、盗森」を留学生以外にも在住外国人の参加を呼びかけて実施します(2010年1月)。

今後も徳島という地域での国際化、多文化共生に対する取り組みを進めていきます。



ベトナム社会主義共和国
ハノイ市
貿易大学（ハノイ）で
日本語を教える

貿易大学日本語学部専任講師 ブー・テイ・タアン・チャン

学生たちと学習内容

貿易大学は日本でいえば一橋大学のようなところ。貿易大学は単科の大学として1960年に設立され、外国語ができる貿易実務家を養成する国立大学でした。1999年に管理・経営学部、2006年に金融学部などが設立され、現在総合大学に変身しました。貿易大学において、外国語が重要な位置を占めています。学生は英語、日本語、フランス語、中国語、ロシア語のどれかを必修科目として勉強しなければなりません。

貿易大学はベトナムにおいて、最も古い歴史を持つ大学に設置された日本語教育機関です。1973年より日本語学科が設立されるとともに日本語教育が始まり、2006年に日本語学科から学部に進進し、ビジネス日本語コースも開始、ビジネス日本語を専攻とする人を養成しはじめました。

現在、日本語学部で日本語を学ぶ学生は全学年で約800人います。英語に続き2番目の多さです。学生は日本留学や日系企業への就職などを目指して専門科目、そして日本語を学びます。日本語は卒業までに日本語能力試験2級合格を目指します。英語はある程度できる学生が多く、英語に加えて他の外国語を学びたいという考え方の学生が多いです。

学生は経済、経営などを学びさらに日本語を身に付けていきます。専門科目の学習時間もあり、1年間に日本語クラスに使う時間は多くはありません。学習時間は総合

日本語、聴解、読解などを含めて1年間で180時間くらいです。卒業までの4年間に630時間程度の日本語学習となります。4年間、前後期で8期ありますが、4年生の後期は就職活動に時間を使うので勉強に集中するのは7期までです。

日本語学習の内容は1、2年生で入門、初級、中級までを学習し3年生になるとビジネスや商談のための日本語を学習します。社外へのオファー文書作成や品質管理など就職してから役立つ内容になっています。1回の授業は3コマで、1コマは50分です。例えば2年生の場合は市販の教材を使い、授業は課ごとに進め、1課を3回に分けて教えています。1回目の授業は文型とその練習、聴解と漢字です。2回目の授業は残りの文型とその練習、聴解です。3回目は教科書の本文です。学生には家で予習や復習をさせています。そのチェックとして授業のはじめに漢字テスト、文型テスト、語彙テストなどの小テストを行っています。また日本語のコミュニケーションの力を伸ばすために、授業ごとにコミュニケーション活動を取り入れています。時間の節約のため授業の終わりにその日に教えた内容を組み込んだコミュニケーション活動を紹介します。課題を与えて、次の日に演習させます。学生たちは家で勉強しておかないと遅れてしまうことになります。大変ですが、学生も教師も頑張らなければなりません。

日本への期待

日本語学習者は現在も増え続けています。私は19年前に貿易大学日本語学部に入學して日本語を学びました。当時は24人だけでしたが、現在は約800人います。日本への期待の高まりだと思います。専門性を身に付け日本語ができれば工業団地の日系企業や金融関連の会社、貿易会社、そして通訳などもできチャンスが広がります。

日本を体験してほしい

私は日本語を教えて14年目になりますが、日本語学部で勉強している学生たちには是非とも日本への留学や、短期でもいいので日本を体験してほしいと思っています。なかなか得られない機会ですが、働く上でもとても大切なことだと思います。

私は今まで数回日本に行きました。12年前、日本語教授法を学ぶために来たのが初めてです。外国人にとり日本人の考え方を理解するのは簡単ではありません。日本に行って日本を経験することで、日本人を理解するためのヒントが得られると思っています。

デパートに行っても10数年前の日本人と今の日本人では働き方や態度、コミュニケーションのとり方が違ってきています。今のほうが自由な感じがします。また、人生観なども変化しているような気がします。ベトナムではあまり考えられないのですが、結婚しても子どもを持たずペットを飼う日本人がいます。ローンを組んで犬を買うというのにもびっくりしました。前は働き蜂のイメージだった日本人も今は普通に働いている感じがします。会社ではなく自分を愛している感じ。家族観についてはベトナム人とずいぶん違うと思います。日本人に家族の人数を聞くと、父、母、子どもの人数だけのときが多いのですが、ベトナム人はおじいさんやおばあさんも家族の人数に入れます。

日本に来ることによっていろいろなことに気が付くのではないのでしょうか。知識や体験したことを考察し他人と話し合ったりしながら自分の中に蓄えることが将来の役に立つと思います。

私は2009年の10月から2カ月間、貿易大学のプログラムで日本の日本語学校での教師研修のため来日しました。今回の研修を生かしつつ、これからの学生たちに日本の魅力を伝えながら教育の質を向上させていきたいと思っています。



漢字小テスト中の3年生

教材 紹介

『聴くトレーニング〈聴解・聴読解〉応用編 日本留学試験対応』

『正しく書ける カタカナ語ずらずら 1日10分』

『中間言語語用論概論 第二言語学習者の語用論的能力の使用・習得・教育』

『聴くトレーニング〈聴解・聴読解〉応用編 日本留学試験対応』

元琉球大学留学生センター専任講師 澁川 晶

本書は、2006年に出版された『聴くトレーニング〈聴解・聴読解〉基礎編』の続編として出されたものです。応用編である本書は、中級後半から上級レベルの学習者を対象とし、下記のとおり3部構成で段階的にトレーニングが行えるようにデザインされています。漢字語彙を多く取り上げ、慣用表現や四字熟語なども扱っています。話の内容も専門的なものが多く、大学での学習場面で遭遇する可能性の高いものが中心となっています。

パート1 基本練習編

- セクション1 基礎トレーニング：聞き取りにくい音声を含む言葉を聞く練習をします。言葉だけを聞くのではなく、文の中で言葉を聞き取る練習もします。
- セクション2 表現のトレーニング：慣用表現や四字熟語を文の中で聞き取り、意味を考える練習をします。その後で、慣用表現や四字熟語が使われている会話や独話を聞き、その内容を理解する練習もします。
- セクション3 語彙のトレーニング：大学での学習・研究生活に必要な語彙を8つの分野別に取り上げています。文の中で言葉を聞き取る練習だけでなく、それらの言葉と言い換えられる言葉、関連のある言葉を選ぶ練習もあります。さらに、練習した言葉が含まれている会話や独話を聞き、その内容を理解する練習もあります。最後に分野ごとの語彙リストもあります。ここで取り上げる語彙は、「日本留学試験」の過去の問題で出題されたものが中心となっています。

パート2 例題と解法編

- セクション1 ストラテジー：試験問題だけでなく、何かを「聞く」際に広く役立つストラテジーを2つ（推測と予測）取り上げています。それぞれ、一文、会話または独話の中で練習できるよう工夫されており、どのような要素を手がかりに推測・予測をすればよいのか、解説されています。
- セクション2 課題のタイプ：
 - ①情報を把握して特定していく聞き方
 - ②全体から内容を把握、理解していく聞き方
 の2つの聞き方を提示し、それぞれに4つの課題のタイプを示し、各タイプの問題の解き方を、「日本留学試験」と同形式の例題を示しながら解説しています。ここで取り上げる課題のタイプは、「日本留学試験」の過去の問題を分析した結果、得られたものです。

パート3 実践編

パート1と2で練習したことを踏まえ、パート3では実際に「日本留学試験」と同じ形式の問題を解く練習をします。「聴解」「聴読解」問題ともに10問ずつあります。別冊には正答だけでなく、課題のタイプも示されており、苦手なタイプの問題はパート2に戻って練習することもできます。

このように、本書は、「日本留学試験」の受験を目指す学習者に役立つよう配慮して作成されたものですが、基本的な音声の聞き取り練習、聞くこと全般に応用できるストラテジーの解説なども充実しており、ぜひ、中上級レベルの聴解教材として活用していただきたいと考えています。中上級レベルの聴解教材はまだ豊富にあるとは言えず、これまでの教材では、聞き取ればそれでOK、という内容が多かったのではないかと思うのですが、本書では、聞き取れたことをきっかけに、その語彙・表現の意味を考えたり、その先の学習につながるよう工夫されています。内容的にも、生物、科学、心理、教育などの分野の話題が取り上げられており、中上級レベルの学習者にも興味深く聞いてもらえると思います。また、本書の解説部分は英語、中国語、韓国語の3カ国語の翻訳もついているため、学習者が自習する際にも理解が深められるようになっています。さらに別冊には「振り返りシート」が用意されていて、問題に取り組んだ後にいくつかの質問に答えることによって、なぜその問題ができたのか（できなかったのか）学習者自身が把握できるようになっています。

本書を、日本語教室の中だけでなく、学習者が自習する際にも活用し、「日本留学試験」対策として、より高い聴解スキルを身につける手段として、役立てていただければ幸いです。

聴くトレーニング〈聴解・聴読解〉 応用編 日本留学試験対応

B5判 185頁+スクリプト・解答33頁 CD 2枚付 2,520円
澁川 晶・島田めぐみ・伊能裕晃 著



【好評発売中】

聴くトレーニング〈聴解・聴読解〉 基礎編 日本留学試験対応

B5判 210頁+スクリプト・解答23頁 CD 2枚付 2,310円
澁川 晶・宮本典以子・坂野加代子 著



『正しく書ける カタカナ語すらすら 1日10分』

日本語教師 河野桐子

「カタカナ語」をどう教えるか、という問題は、教育現場で働く私の長い間の悩みの一つでした。

「外来語」はその多くが「英語」に由来しています。このため、日本語学習者がカタカナ語を表記しようとするとき、「自分たちが認識している英語の発音」をそのままカタカナ語に置き換えようとして、以下のような間違いを起こしがちです。

例① 英語圏の日本語学習者の場合

「イメージ」⇒「イミジ」

例② 中国人の日本語学習者の場合

「ダンス (dance)」⇒「タンス」

例①では、英語圏の学習者が「image」の発音から「イミジ」と書いています。また例②では中国人の学習者が「da」の音を、母国語の音に置き換え、「タンス」と書いたものと思われる。

さらに、教師が発音した「カタカナ語」を聞いて書く場合にも、上記と同じような間違いを起こしてしまうことが多くありました。

そこで、この問題を解決するために一つの方法を考えました。

「アルファベットのそれぞれの音」と「カタカナの文字」がどのように対応しているかを法則化し、「英語のつづり」から「カタカナ文

字」を類推させ、「表記」できるようにしたのです。

これを利用して以下のような練習を始めました。

まず、教師が発音した「カタカナ語」を日本語学習者が聞き取り、同時にプリントに書かれた「英語のつづり」を確認しながら、「カタカナ語」を「表記」します。

この方法で毎日少しずつ学習した結果、わずかな期間でほとんどの学生が「カタカナ語」を正確に聞き取り、表記できるようになりました。また、たとえ習っていない「外来語」にぶつかっても「英語のつづり」を利用して、「カタカナ表記」できるようになったのです。

本書に記した法則は、全ての「カタカナ語」に当てはまるわけはありませんが、外国人にとって難しい「外来語のカタカナ表記」を類推する「センス」を養う教材として活用していただけたらいいと思います。

正しく書ける カタカナ語すらすら
1日10分A5判 69頁+解説・解答14頁 CD 1 枚付 1,050円
河野桐子 著

『中間言語語用論概論 第二言語学習者の語用論的能力の使用・習得・教育』

上智大学国際教養学部/大学院外国語学研究所 准教授 清水崇文

「日本語を使ってコミュニケーションができるようになりたい」という願いは、学習者が日本語を学ぶ主な動機の一つではないかと思いますが、対面コミュニケーションを成功させるた

■ 本書の構成

- 第1部 中間言語語用論を学ぶための基礎知識
 - 第1章 コミュニケーション能力と語用論的能力
 - 第2章 語用論の諸理論
 - 第3章 中間言語語用論研究の方法
- 第2部 異文化間語用論
 - 第4章 異文化間語用論
- 第3部 中間言語語用論
 - 第5章 語用論的知識の使用
 - 第6章 語用論的転移
 - 第7章 語用論的能力の習得
 - 第8章 中間言語語用論の言語教育への応用

めには、文法的に正しい文を作り出せるだけでは十分ではありません。それに加えて、それらの文を「いつ」「どこで」「誰に対して」「どのように」使うのかも知っていなければならないからです。前者はいわゆる「文法」に関する能力、そして後者が「語用論」(語の使い方)に関する能力と呼ばれているものです。

本書は、この第二言語学習者の語用論に関する能力の研究である「中間言語語用論」について日本語で書かれた初めての入門書です。中間言語語用論の研究によってこれまでに明らかにされてきた多くのことをわかりやすく整理し、読者の皆さんがこの分野の全体像を把握できることをねらいとしています。そのために、まず第1部で

は、コミュニケーション能力と語用論的能力の説明から始めて、中間言語語用論を理解するのに必要な語用論の諸理論やデータに基づく研究方法に関する知識を整理しました。続く第2部では、中間言語語用論の基盤となった異文化間語用論について詳しく紹介しています。そして、本論である第3部では、理解と産出の両側面における学習者の語用論的知識の使用、母語からの語用論的転移、語用論的能力の習得、語用論的能力と文法能力の関係、学習環境の影響、教室指導の効果などについて概観し、最後に中間言語語用論の外国語教育への応用について考察しています。

国内外の様々な現場で日本語教育に携わっておられる先生方の中には、文法練習や訳読を中心とした指導方法に限界を感じていたり、学習者のコミュニケーション能力を育成することに腐心しておられる方も多いでしょう。日本語学習者を含む様々な第二言語学習者の語用論的能力の使用・習得・教育について考察した本書は、こうした方々に新たな視点や道具を提供できるのではないかと思います。

中間言語語用論概論
第二言語学習者の語用論的能力の使用・
習得・教育

A5判 342頁 2,100円 清水崇文 著





SEMINARS

セミナー



●中級レベルの指導法

『みんなの日本語中級Ⅰ』を利用して福岡会場

『みんなの日本語 初級』は、日本語の基礎となる文法と語彙を着実に積み上げ、日常会話場面への適応力、実践的な会話運用力を養うことで定評があります。この度、初級シリーズの学習者からのニーズに応え、中級シリーズが制作されました。『みんなの日本語 中級Ⅰ』は、日本語学習の中級前期（初級から中級への橋渡し）の時期に必要な「話す・聞く」「読む・書く」の総合的な言語能力と実践的に自ら学ぼうとする力を培うことを目的としています。

今回の研修会では『みんなの日本語中級Ⅰ』を利用して、初級との違いを含めた中級レベルの指導法について、参加者の皆様とともに考えていきます。

日 時： 3月6日（土）
14:00～16:00（受付13:30～）
会 場： 九州英数学館国際言語学院本館141番教室（福岡県福岡市中央区舞鶴1-5-30）
講 師： 新内康子
（『みんなの日本語中級Ⅰ』執筆協力者、志學館大学人間関係学部人間文化学科教授）
定 員： 150名（先着順。定員次第締切）
参加費： 無料
主 催： スリーエーネットワーク

●聴解・聴読解力養成の実践法

新刊説明会『聴くトレーニング（聴解・聴読解）応用編 日本留学試験対応』

学習者が中級から必要になる聴解力とは？ 日本留学試験に求められる聴解力とは？ 今回の説明会では、参加者の皆様とワークショップ形式を交えながら、本書と本書の姉妹版『聴くトレーニング（聴解・聴読解）基礎編 日本留学試験対応』を使った「聴解・聴読解力養成の実践法」について、著者がお話いたします。

日 時： 3月14日（日）
14:00～16:00（受付：13:30～）

BOOKS

ほん

日本語初級2 大地 文型説明と翻訳 英語版	発売中	2,100円
聴くトレーニング〈聴解・聴読解〉応用編 日本留学試験対応（CD 2枚付）	発売中	2,520円
韓国語文法 語尾・助詞辞典	2月発売予定	4,830円
みんなの日本語 中級Ⅰ 翻訳・文法解説ドイツ語版	3月発売予定	1,680円

すべて税込価格です

会 場： 日本教育会館7階中会議室
（東京都千代田区一ツ橋2-6-2）
講 師： 澁川 晶
（『聴くトレーニング〈聴解・聴読解〉応用編 日本留学試験対応』『同 基礎編』共著者、元琉球大学留学生センター専任講師）
伊能裕晃
（『聴くトレーニング〈聴解・聴読解〉応用編 日本留学試験対応』共著者、東京学芸大学留学生センター非常勤講師）
定 員： 120名（先着順。定員次第締切）
参加費： 無料
主 催： スリーエーネットワーク

参加費： 無料
共 催： 丸善・スリーエーネットワーク
問い合わせ/申込先：
丸善仙台アエル店洋書フロア 担当佐藤
宮城県仙台市青葉区中央1-3-1 AER 1階
TEL: 022-264-0151
FAX: 022-264-0112
住所・氏名・所属・電話番号を明記の上、FAXまたは店頭にてお申込みください。お申込み後キャンセルの場合は必ずご一報ください。

上記2件のお問い合わせ・お申込先

■スリーエーネットワーク講座係
TEL: 03-3292-6193 FAX: 03-3292-6194
E-mail: kouza@3anet.co.jp
101-0064 東京都千代田区猿樂町2-6-3 松栄ビル
住所・氏名・所属・電話番号・ご希望のセミナーを明記のうえ、電話・FAX・メールのいずれかにてお申し込みください。

●丸善・スリーエーネットワーク共催
2010年日本語教育セミナー①
『もしも…あなたが外国人と「日本語で話す」としたら』

『もしも…あなたが「日本語を教える」としたら』、『続・もしも…あなたが「日本語を教える」としたら』の著者、荒川洋平先生が、第3弾の刊行に先駆けて、5度目の来仙です！ 今回はメインテーマの一つでもある「対外日本語コミュニケーション」を、具体的に紹介します。日々進む「日本語の国際化」について理解を深め、外国語としての日本語を話す方法、教える方法を、一緒に考えていきましょう。面白さ100点、わかりやすさ1000点のセミナーです！

日 時： 3月13日（土）
13:30～15:30（受付：13:00～）
会 場： 戦災復興記念館 5階会議室
（宮城県仙台市青葉区大町2-12-1）
講 師： 荒川洋平
（東京外国語大学 留学生日本語教育センター准教授（認知言語学））
定 員： 80名（先着順）

●凡人社麴町店 店頭イベント
『日本語初級 大地』を体験してみよう！

2009年10月に初級日本語総合教材『日本語初級2 大地 メインテキスト』が発行されました。本シリーズを使うことで、日本語文法の基礎力がしっかりと身につく、豊富なイラスト、多様な練習問題（ドリル、インフォメーションギャップ、ロールプレイ、ディスカッション他、多様なタスク）で運用力を養成しながら、楽しく学習することができます。今回のイベントでは著者の本シリーズの実際の使用事例を交えながら、参加者の皆様と『日本語初級 大地』の使い方を体験してみたいと思います。

日 時： 3月27日（土）
14:00～15:30
会 場： 凡人社麴町店
（東京都千代田区平河町1-3-13
TEL：03-3239-8673）
講 師： 山崎佳子
（『日本語初級 大地』共著者、東京大学大学院工学系研究科）
町田恵子
（『日本語初級 大地』共著者、財団法人アジア学生文化協会日本語コース）
主 催： 凡人社
協 力： スリーエーネットワーク
* 参加費無料、予約不要のイベントです。

●『Ja-Net』をご希望の方はお名前・ご住所・ご所属を編集室までお知らせください。無料でお送りいたします（国内のみ）。『Ja-Net』第53号は4月25日発行です。

Ja-Net 季刊 ジャネット No. 52

スリーエーネットワークという社名は、アジア（Asia）、アフリカ（Africa）、ラテン・アメリカ（Latin America）のいわゆる発展途上国の多くが存在する三つの地域をネットワークでつなぎ、相互理解と友好促進を図ろうという趣旨をシンボライズしています。

2010年1月25日発行
●発行人 小林卓爾
●発行所 (株)スリーエーネットワーク
営業広報部 Ja-Net 編集室
〒101-0064 東京都千代田区猿樂町2-6-3 松栄ビル
TEL 03-3292-6193 FAX 03-3292-6194
E-mail: ja-net@3anet.co.jp http://www.3anet.co.jp/
●印刷 日本印刷(株)
© 2010 by 3A Corporation Printed in Japan (禁無断転載)